

福童東内畑遺跡 2

— 福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告 —

小郡市文化財調査報告書 第 3 6 9 集

2025

小郡市教育委員会

序

小郡市において、行政による本格的な発掘調査が始まってから、はや半世紀が過ぎました。この間、ニュータウン開発や工業団地の造成、都市機能の整備など、さまざまな開発事業に伴って発掘調査が行われてきました。

このような調査により、国指定史跡「小郡官衙遺跡群」や重要文化財「小郡若山遺跡出土品」（多鈕細文鏡ほか）といった貴重な文化財が発見されてきました。これまで市内で見つかった考古資料の数は10万点以上に及び、ふるさと小郡の歴史を私たちに語ってくれています。

今回報告いたします福童東内畑遺跡は、近世の農村集落として知られた遺跡です。道路改良工事や宅地造成など、周辺の発掘調査の成果から、当時の暮らしの様子が徐々に明らかにされています。江戸時代、久留米藩の穀倉地帯であったこの地域には、現在でも豊かな田園風景が広がっており、人びとの生活の営みが連綿と続いていることが感じられます。本書が郷土の歴史を広く知らしめ、のちの学術研究や地域振興の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において地元福童区のみなさまには多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

令和7年3月31日

小郡市教育委員会

教育長 秋永 晃生

例言

1. 本書は小郡市福童に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地・福童東内畑遺跡地内で計画された、宅地造成及び建売住宅建設に先立って実施した発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に掲載した遺構図面は、調査担当者と柏原孝俊・高橋渉・三津山靖也が作成した。
3. 発掘現場での写真は調査担当者が撮影した。
4. 出土遺物の洗浄・復元には佐々木智子・西 初代・元石みつの協力を得た。遺構図面の製図及び遺物実測は調査担当者が行い、遺物実測図の製図は林 知恵が行った。
5. 遺物写真の撮影は、有限会社システム・レコに委託した。
6. 本調査に関わる出土遺物・写真・カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。

住居：SC 掘立柱建物：SB 土坑：SK ピット：SP 不明遺構：SX

本文目次

I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. 福童東内畑遺跡2の遺構と遺物	4
IV. 調査成果のまとめ	17

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=25,000)	3
第2図 調査地位置図 (S=1/5,000)	3
第3図 I区 遺構配置図 (S=1/100)	4
第4図 III区 遺構配置図 (S=1/100)	4
第5図 II区 遺構配置図 (S=1/100)	5
第6図 1号住居 平・断面図 (S=1/40)	6
第7図 2号住居 平・断面図 (S=1/40)	8
第8図 1・2号住居 出土遺物 (S=1/4)	9
第9図 1～3号掘立柱建物 平・断面図 (S=1/60)	10
第10図 ピット 出土遺物 (S=1/4)	11
第11図 1～5号土坑 平・断面図 (S=1/40)	12
第12図 6・8号土坑 平・断面図 (S=1/40)	14
第13図 土坑 出土遺物 (S=1/4)	15
第14図 不明遺構 出土遺物 (S=1/4)	16
第15図 周辺調査地検出遺構 (S=1/500)	18

図版目次

図版1 ① I区全景 (西から)	図版3 ① 1・2号土坑 完掘状況 (東から)
② II・III区全景 (東から)	② 4号土坑 完掘状況 (東から)
図版2 ① 1号住居 全景 (西から)	③ 5号土坑 土層断面 (北から)
② 1号住居 遺物出土状況 (1) (北から)	④ 5号土坑 完掘状況 (北から)
③ 1号住居 遺物出土状況 (2) (北から)	⑤ 6号土坑 土層断面 (西から)
④ 1号住居 完掘状況 (北から)	⑥ 6号土坑 完掘状況 (東から)
⑤ 2号住居 土層断面 (東から)	⑦ 8号土坑 土層断面 (東から)
⑥ 2号住居 小ピット検出状況 (北東から)	⑧ 8号土坑 完掘状況 (西から)
⑦ 2号住居 全景 (西から)	図版4 出土遺物
⑧ 2号住居 完掘状況 (北から)	

I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

小郡市福童に所在する福童東内畑遺跡は、佐賀県鳥栖市との県境から約 150m の位置にあり、平成 17 年に市道下町西福童 16 号線の拡幅工事に先立って遺跡の存在を確認した。主体となるのは中世から近世にかけての集落で、周辺に分布する福童町遺跡、福童石橋遺跡、福童法司遺跡も同様である。

今回の調査は、宅地造成及び建売住宅の建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」(事前審査番号 23056)が提出されたことに始まる。当該地は令和 3 年度に試掘調査を実施しており、南半部には現況 GL より - 35cm に埋蔵文化財が存在することを確認していたため、地権者・施工業者と小郡市教育委員会で協議を行った。その結果、宅地造成に伴う新設道路及び建売住宅 2 軒分について令和 5 年度に発掘調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

(2) 調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

＜小郡市教育委員会＞

教育長 秋永晃生

部長 熊丸直樹

文化財課長 杉本岳史 (係長兼務 令和 6 年 7 月～)

係長 山崎頼人 (～令和 6 年 6 月)

技師 上田 恵

＜調査参加者＞ 阿部孝一 木村哲郎 串尾弥代子 早坂幸子 平林昌代 吉田 浩

(以上小郡市在住、五十音順)

(3) 調査の経過

発掘調査は令和 5 年 11 月 13 日から 12 月 25 日にかけて実施した。調査区は遺構検出面までの土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行なった。

以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

11 月 13 日～15 日 I 区より順に調査区表土の重機掘削開始。

11 月 15 日 測量作業に要する基準点設置及び座標移動を実施。

11 月 16 日 機材搬入。I 区において人力による遺構検出・掘削開始。ピット群を確認。

11 月 21 日 I 区の遺構配置図を作成 (～22 日)。Ⅲ区において遺構検出・掘削開始。住居 2 軒、土坑 4 基とピット群を確認。

11 月 28 日 I 区全景写真撮影。

11 月 30 日 Ⅱ区において遺構検出・掘削開始。ピット群を確認。

12 月 5 日 Ⅱ・Ⅲ区の遺構配置図を作成。

12 月 8 日 Ⅱ・Ⅲ区全景写真撮影。

12 月 18 日 機材を撤収。埋戻しによる現況復旧を実施。

12 月 25 日 現地引き渡し、調査完了。以後、図面・出土遺物の整理作業を実施。

II. 位置と環境

（１）地理的環境

小郡市は筑後川の支流である宝満川によって東西に二分され、東側は市内唯一の山である花立山（城山）、西側は脊振山地から派生した丘陵（通称・三国丘陵）があり、それぞれ南へ向かって緩やかに台地へ移行する地形を持つ。

福童東内畑遺跡は、宝満川西岸の台地の南端、南の沖積地に向かって幅広く張り出す低位段丘の南西裾に位置している。遺跡の東隣は現在の西福童区の集落の中心であり、西は佐賀県鳥栖市との県境（旧・筑後・肥前国境）に近接している。遺跡の所在する低位段丘の範囲は、鳥栖市飯田町まで及ぶ。

（２）歴史的環境

遺跡の所在する「福童」は「福同」もしくは「福堂」の表記で南北朝時代の文献から登場する。当時の九州は、北朝方に「九州難儀の事」と言わしめるほど南朝方が優位に立っていた。応安年間、九州探題となった今川了俊は、南朝方の征西府から大宰府を奪還し、さらに高良山へ撤退した軍勢を追撃して筑後を制圧した。この際、北朝方が福童原に布陣したとされている。近年は道路改良工事や宅地造成に先立つ発掘調査が頻繁に行われ、原始・古代から近世にかけての歴史的様相が明らかにされてきている。以下、近隣に分布する遺跡を中心に、歴史的環境の概要を記す。

小郡市内の旧石器・縄文時代の遺構・遺物の確認例は、花立山山麓と三国丘陵にほぼ限定されるが、福童町遺跡 4（14）では縄文土器（鐘崎式）の鉢の破片が出土しており、この地域も生活圏の一部であったと考えられる。

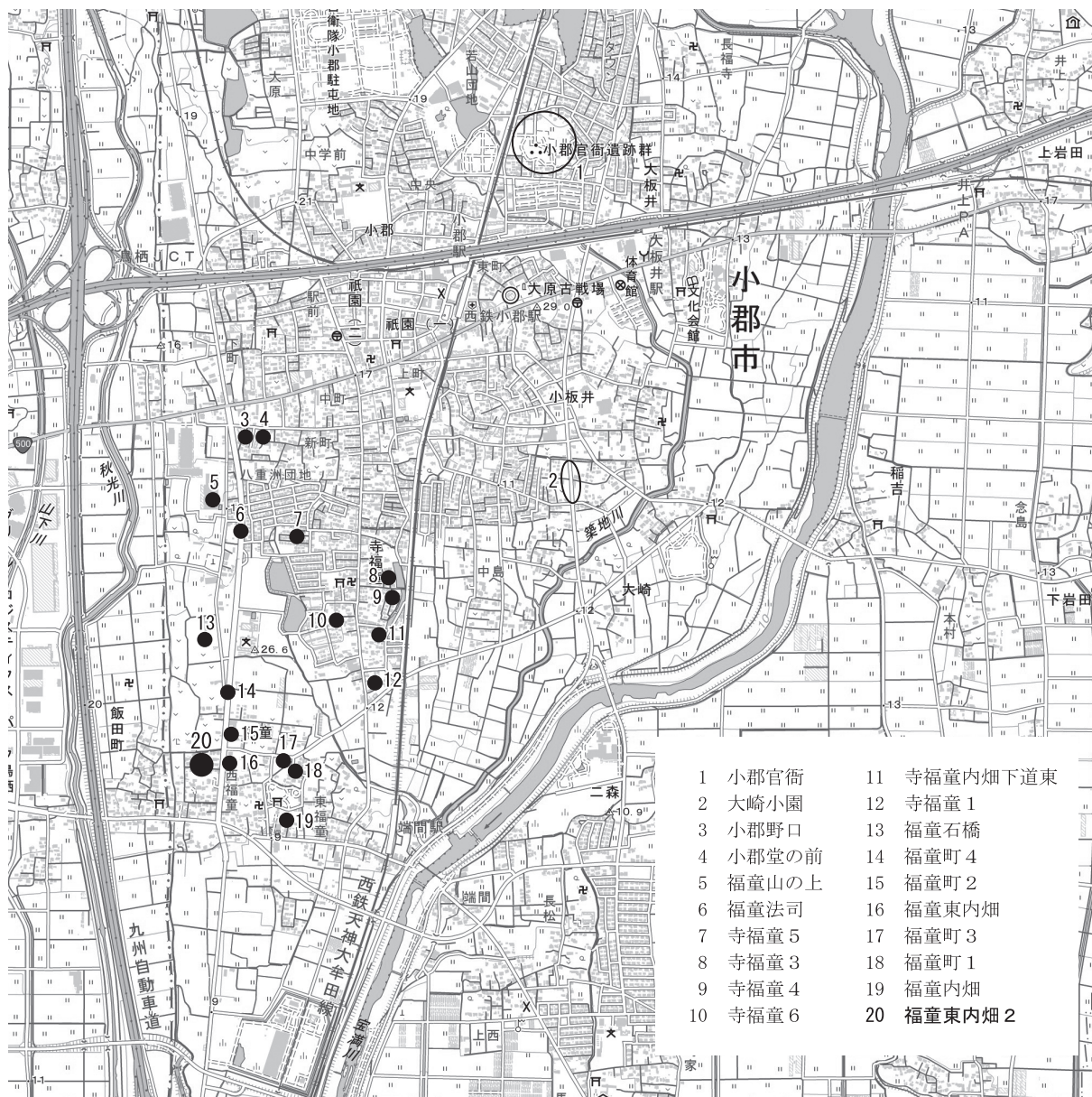
弥生時代になると、三国丘陵から水稻栽培を伴う集落経営が始まり、これが市内各所へ拡大していく。福童町遺跡 4 では、弥生時代前期の甕を伴う溝状遺構を確認している。寺福童遺跡 5（7）では、前期の木棺墓群と中期を主体とする甕棺墓群を検出している。寺福童遺跡 4（9）では、中広形銅戈 9 口を埋納した土坑を検出している。これらの墓域や埋納遺構を形成した集団の集落は、現在のところ未確認である。また福童内畑遺跡（19）では弥生時代中期から後期にかけての住居群を検出しており、この時期から当地でも本格的な集落経営が始まったとみられる。

古墳時代初頭には、福童内畑遺跡や福童町遺跡 1（18）、西鉄天神大牟田線の東側にある大崎小園遺跡（2）で集落が営まれる。同時期の墓域としては、寺福童遺跡 1（12）・6（10）で方形周溝墓を確認している。後期の遺構には、寺福童遺跡 4 の住居群や寺福童内畑下道東遺跡（11）の土壙墓がある。

律令期には、現在の福岡・佐賀県境に西海道が敷かれ、小郡市は三井郡大刀洗町とともに筑後国御原郡と称された。上岩田遺跡・小郡官衙遺跡（1）は御原郡衙に比定されている。寺福童遺跡 3（8）では住居と掘立柱建物、福童町遺跡 2（15）では区画溝が検出されており、わずかながら条里の痕跡もみられることから、このあたりでも集落が営まれていたようである。

中世の遺構・遺物は、近年の調査で多数確認されている。福童山の上遺跡（5）では鎌倉時代の集落や道路状遺構が検出され、輸入磁器が出土した。また小郡堂の前遺跡（4）では 13 世紀中ごろ、小郡野口遺跡（3）では 14 世紀中ごろの集落を確認している。その後、南北朝時代の争乱を経て、中世集落の中心は大保や三沢といった市域北西部へ移行する。

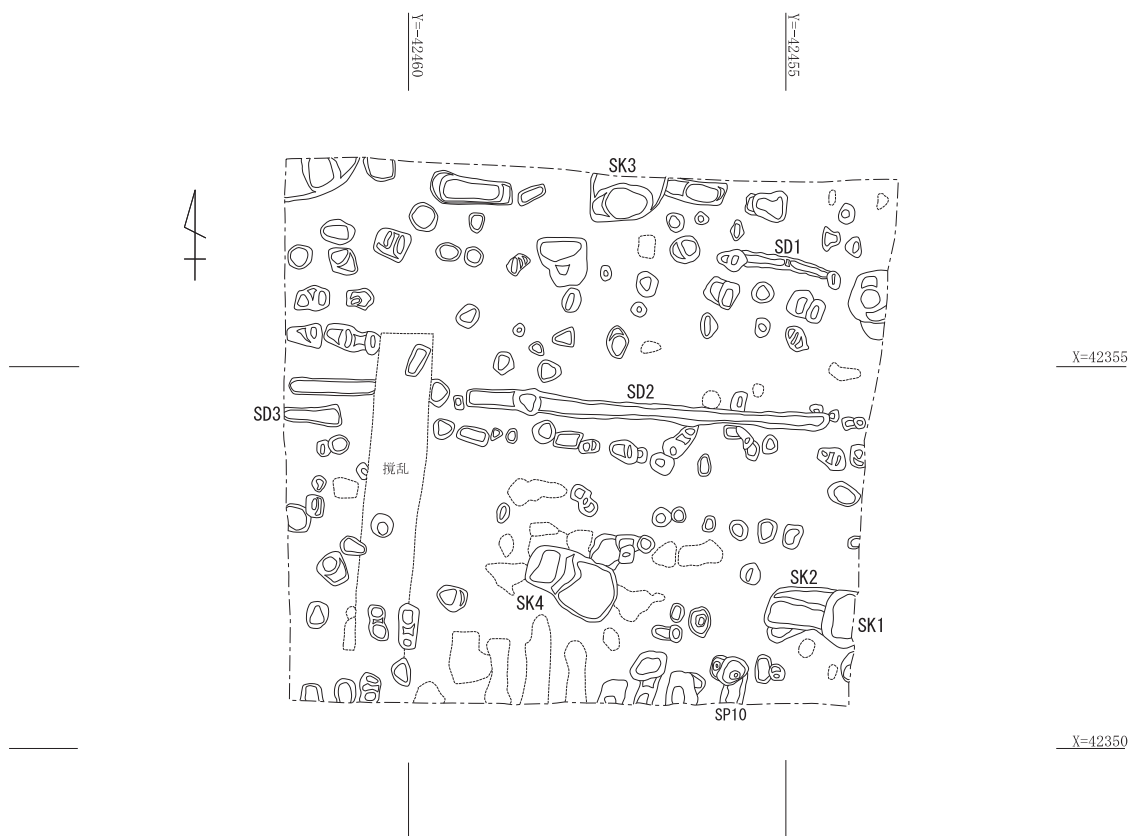
近世の遺構・遺物は、福童東内畑遺跡（16）・福童町遺跡・福童法司遺跡（6）・福童石橋遺跡（13）で検出されているが、いずれも溝状遺構であり、集落の様相を知るには今後の調査が待たれる。



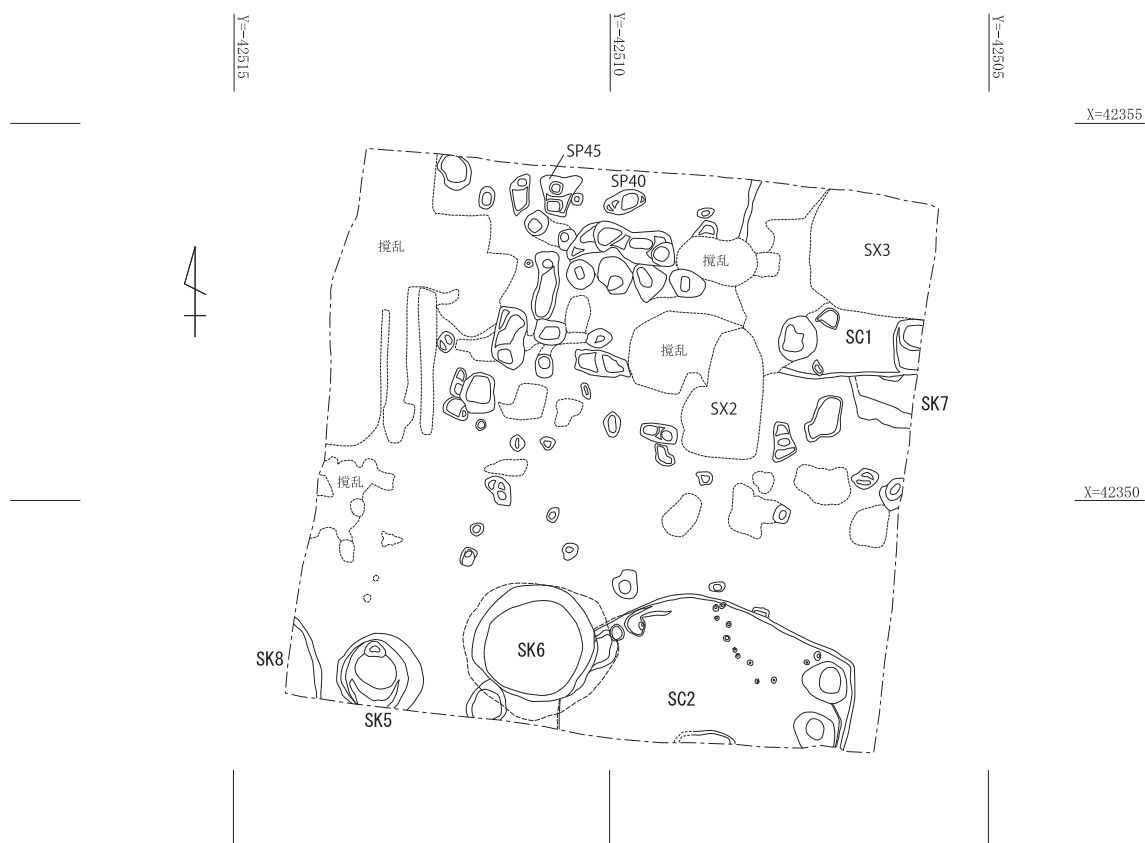
第 1 図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000 国土地理院)



第 2 図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第3図 I区 遺構配置図 (S=1/100)



第4図 III区 遺構配置図 (S=1/100)



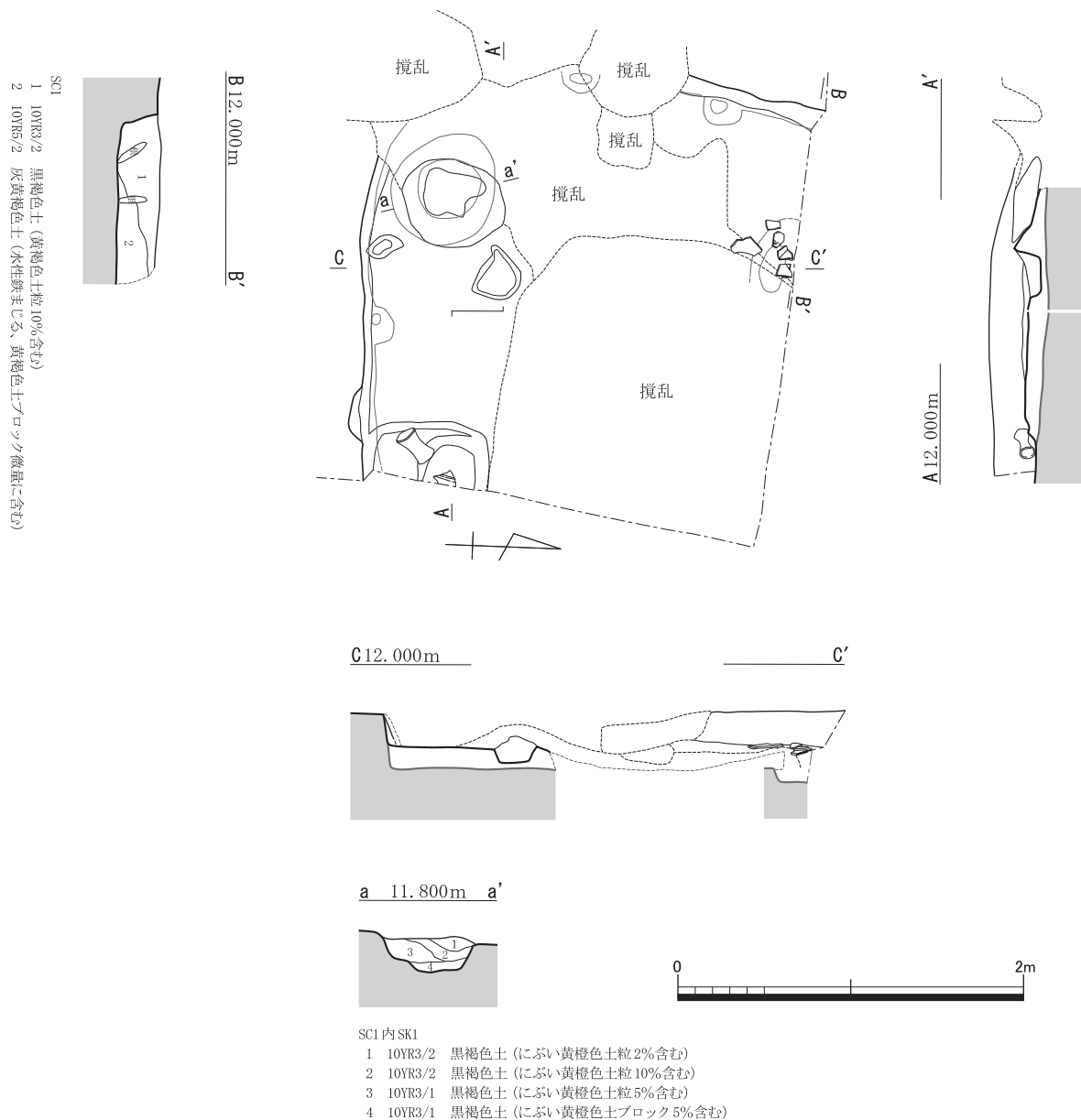
第5図 II区 遺構配置図 (S=1/100)

Ⅲ. 福童東内畑遺跡 2 の遺構と遺物

【調査の概要】

福童東内畑遺跡は、平成 17（2005）年に市道下町西福童 16 号線の改良工事に先立つ事前協議で確認され、平成 18 年度に初めて発掘調査を行った遺跡である。過去の調査では溝状遺構・土坑・不明遺構を検出しており、中世と近世の集落、特に 17 世紀半ばと 18 世紀後半の遺構を確認している。同時期の遺構は北に隣接する福童町遺跡でも検出しており、両者は一連の近世集落であると想定される。

今回の調査区は 1 次調査地の西にあたり、開発計画の都合上、Ⅰ～Ⅲ区に 3 分割して調査を行った。遺構掘り込み面は褐色～黄褐色の粘質土（基盤層）で、標高は 11.15 ～ 11.7 m、旧地形は東から西へ、北から南へ傾斜する。調査区内では住居 2 軒、掘立柱建物 3 棟、土坑 8 基、溝状遺構 3 条を検出した。



第 6 図 1 号住居 平・断面図 (S=1/40)

【SC: 住居】

1号住居（第6図、図版2）

Ⅲ区の北東隅に位置し、北と東は調査区外へ延長する。平面プランは方形、主軸は南北方向で、検出長 2.5m、検出幅 2.6m、深さ 0.23m を測る。南辺に沿って屋内土坑を持つ。埋土は黒褐色土を主体とし、下層に水性鉄を含む灰黄褐色土が堆積している。

掘方の南西部分は後世の攪乱で削平されており、これが床面にも及んでいる。またⅢ区の南東隅にも隅丸方形の掘り込みがあり、住居を削平している。なおこの掘り込みは、後述するが、近世の土坑の可能性がある。大きく削平されているため住居の詳細は不明だが、2柱のものと考えられる。

出土遺物（第8図、図版4）

埋土から少量の遺物が出土しているが、完形のものはずかである。1～5は甕。1は口縁端部が三角に近いもの、2は逆L字を呈するもの。3は胴部が張り出すタイプで肩部に突帯を持つ。6は完形の器台で南西の屋内土坑から出土した。裾部の内外面に被熱による赤変が認められる。7は壺の頸部で、内外面とも丹塗を施す。

2号住居（第7図、図版2）

Ⅲ区の南端、東寄りに位置し、遺構の大半は調査区外に所在する。北西は6号土坑に切られる。平面プランは楕円形、主軸は南北方向で、検出長 2.0 m、幅 3.85 m、深さ 0.23 m を測る。東辺に沿って屋内土坑を持ち、中央には炉として使用したらしい浅い掘り込みを設けている。調査終了後、重機による埋め戻しの際に南側の範囲を確認したが、全長 5.3 m になることを確認した。埋土は均質な黒褐色土で、屋内土坑も同様である。

北東隅で、壁面を半円形に囲うように分布する径 10cm 前後のピット群を検出した。貼床を剥いだところ、この部分に不整形の掘り込みがあったことから、何らかの屋内施設の痕跡と考えられる。

出土遺物（第8図、図版4）

遺構の東側の埋土を中心に遺物が出土しているが、いずれも小片である。8～11は大型の甕、14・15は中型の甕の口縁である。いずれも逆L字を呈するが、端部が緩く垂れ下がるものと直線的に伸びるものが混在している。内外面の調整は摩滅気味で、残存状況は悪い。12は丹塗磨研を施した壺の口縁部で、放射状の暗文が見られる。13は黒塗の壺の胴部で、肩部に断面がM字の突帯を持つ。

【SB: 掘立柱建物】

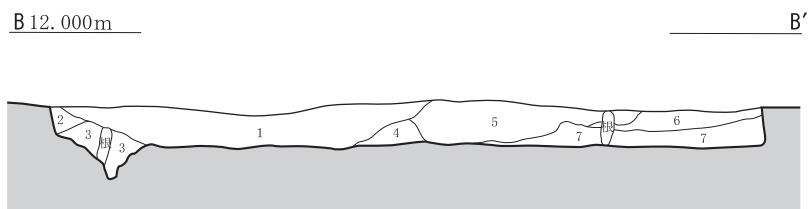
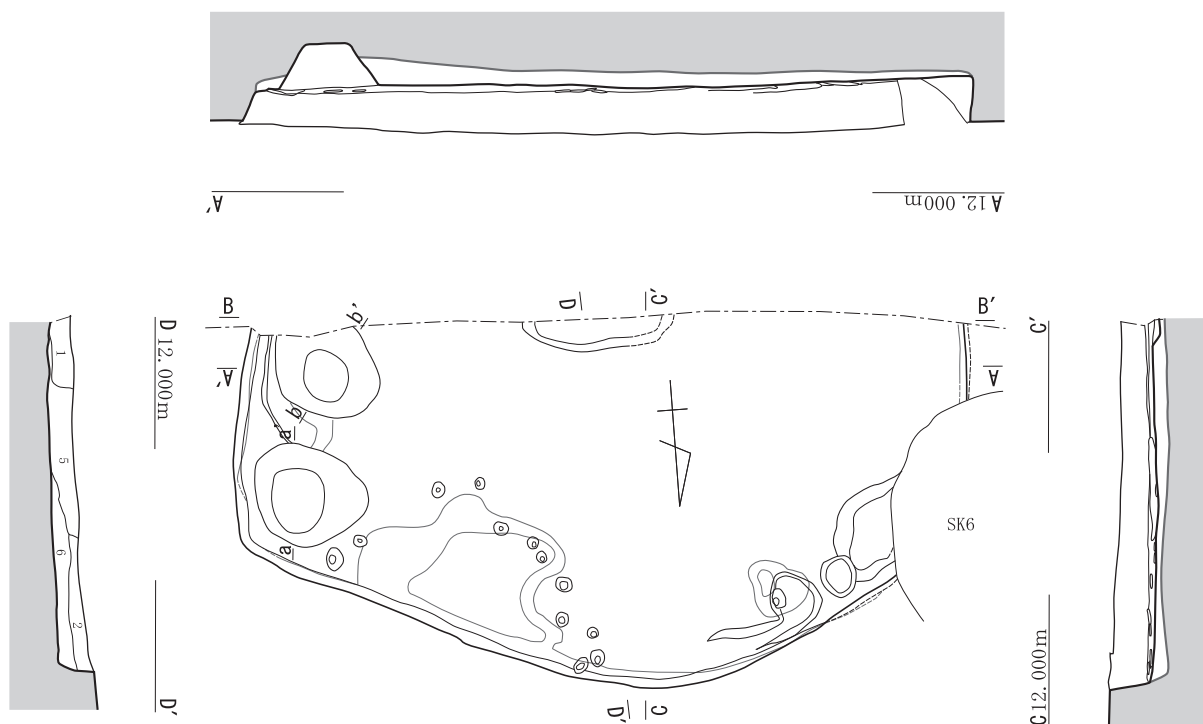
調査時点にはピット群として取り扱っていたが、図面及び遺物整理を行った際、出土遺物と遺構の位置関係から3棟を掘立柱建物と判断した。

1号掘立柱建物（第9図）

Ⅱ区の北東に位置し、大半が調査区外に所在するため、建物の方位・規模は不明である。検出した範囲では柱間は 2.8 m である。掘り方は不正円形を呈し、径 0.4～0.6 m、深さ 0.4～0.65 m を測る。

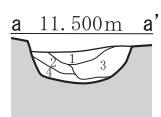
出土遺物（第10図、図版4）

SP59から弥生土器の壺が出土している。外面は磨き調整で、内外面とも丹塗を施す。



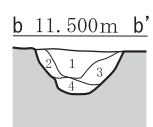
SC2

- 1 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック10%含む) 一試掘トレンチ埋土
- 2 10YR3/1 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック5%含む)
- 3 10YR2/2 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック2%含む)
- 4 10YR2/2 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック2%含む、しまり良い)
- 5 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック30%含む)
- 6 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック10%含む)
- 7 10YR3/1 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック20%含む)



SC2内SK1

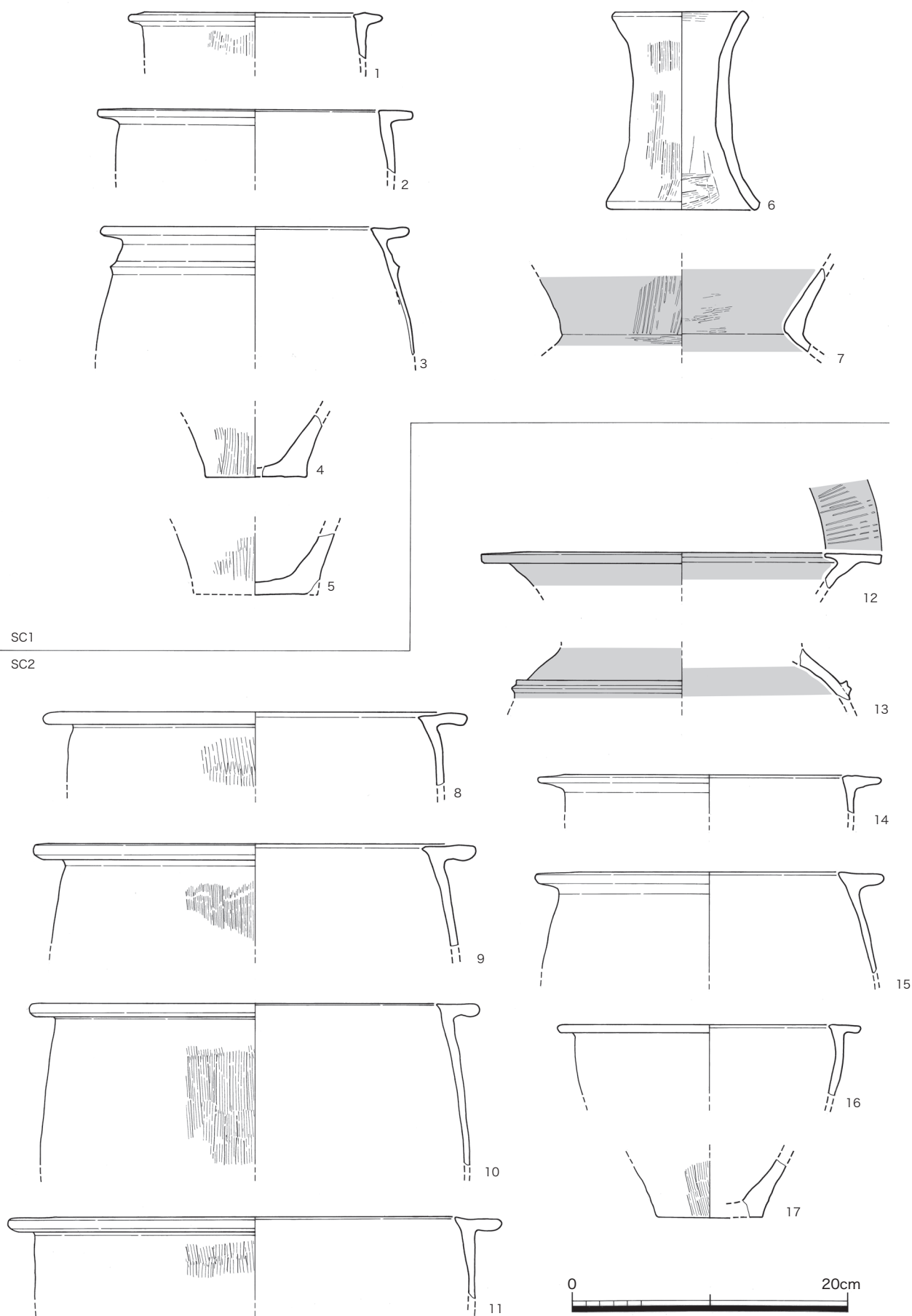
- 1 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄橙色粒10%含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄橙色ブロック5%含む)
- 3 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄橙色粒5%含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色土 (にぶい黄褐色土ブロック5%含む)



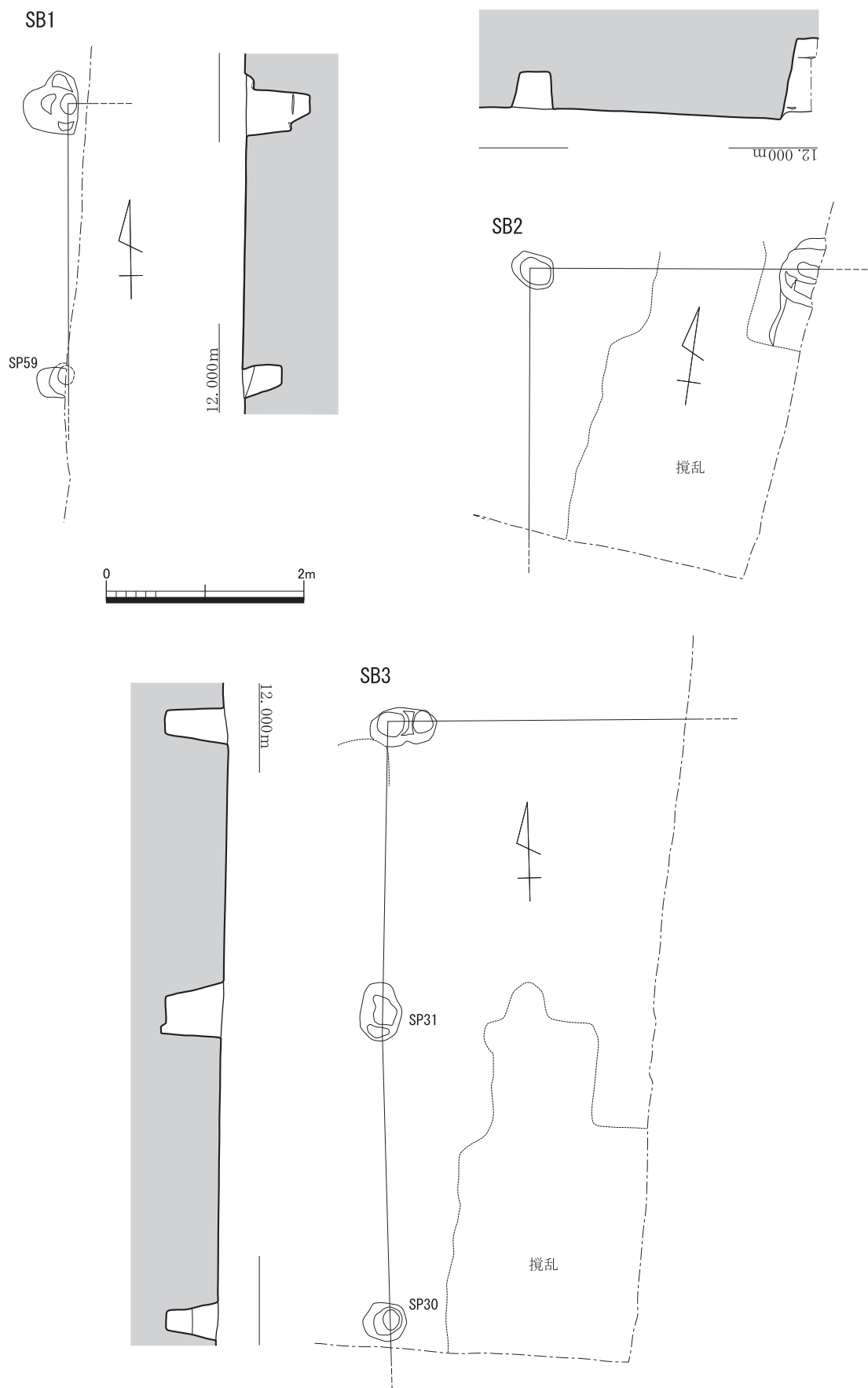
SC2内SK2

- 1 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄橙色粒5%含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄橙色粒2%含む)
- 3 10YR3/2 黒褐色土 (にぶい黄橙色粒10%含む)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (暗褐色土ブロック10%含む)

第7図 2号住居 平・断面図 (S=1/40)



第8図 1・2号住居 出土遺物 (S=1/4)



第9图 1~3号掘立柱建物 平・断面图 (S=1/60)

2号掘立柱建物（第9図）

Ⅱ区の南東に位置し、大半が調査区外に所在するため、建物の方位・規模は不明である。検出した範囲では柱間は1.8 mである。掘り方は楕円形を呈し、径0.25～0.4 m、深さ0.4～0.85 mを測る。

遺物の出土はない。

3号掘立柱建物（第9図）

Ⅱ区の中央から南東にかけて位置する。遺構の東半部は調査区外のため、建物の方位・規模は不明である。検出した範囲では柱間は1.8～1.9 mである。掘り方は楕円形を呈し、径0.4～0.6 m、深さ0.5～0.6 mを測る。

出土遺物（第10図）

SP30・31から弥生土器が出土している。SP30は器台の裾部。SP31は壺の胴部、遺構の壁面に貼りついた状態で見つかった。

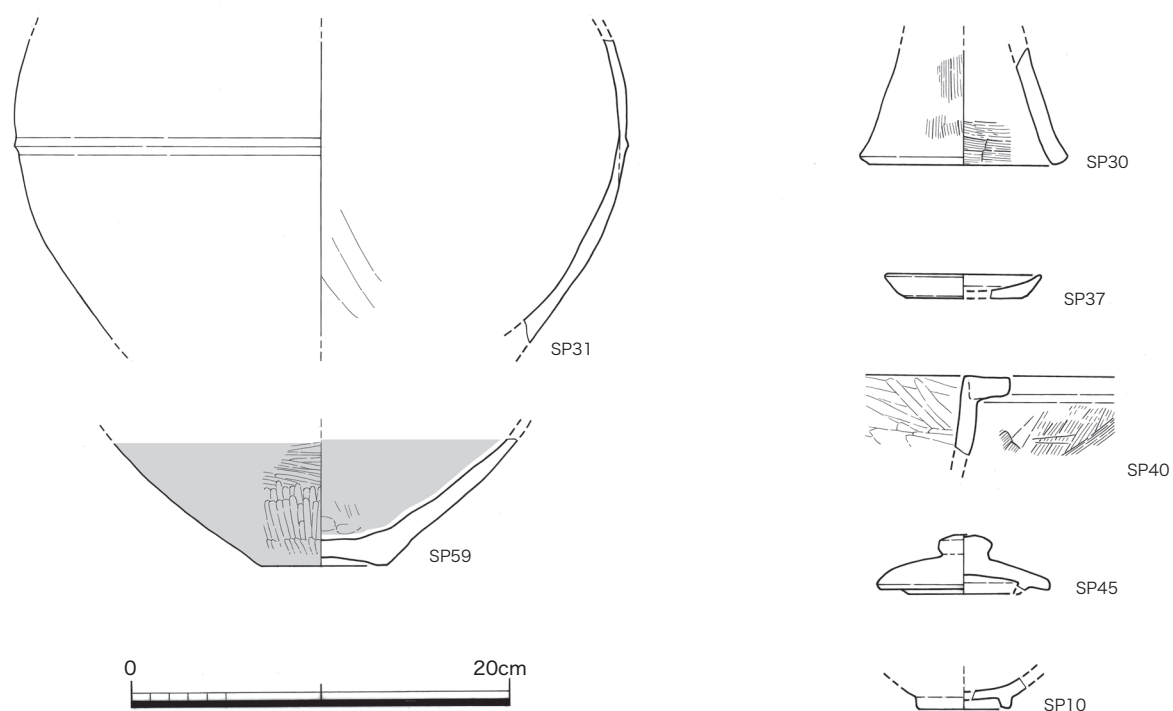
【SP: ピット】

調査区全域で多数のピットを検出している。近現代の耕作等に由来するものが大半であったが、一部から中・近世の遺物が出土しており、他のピットとともに一連の遺構を構成する可能性がある。

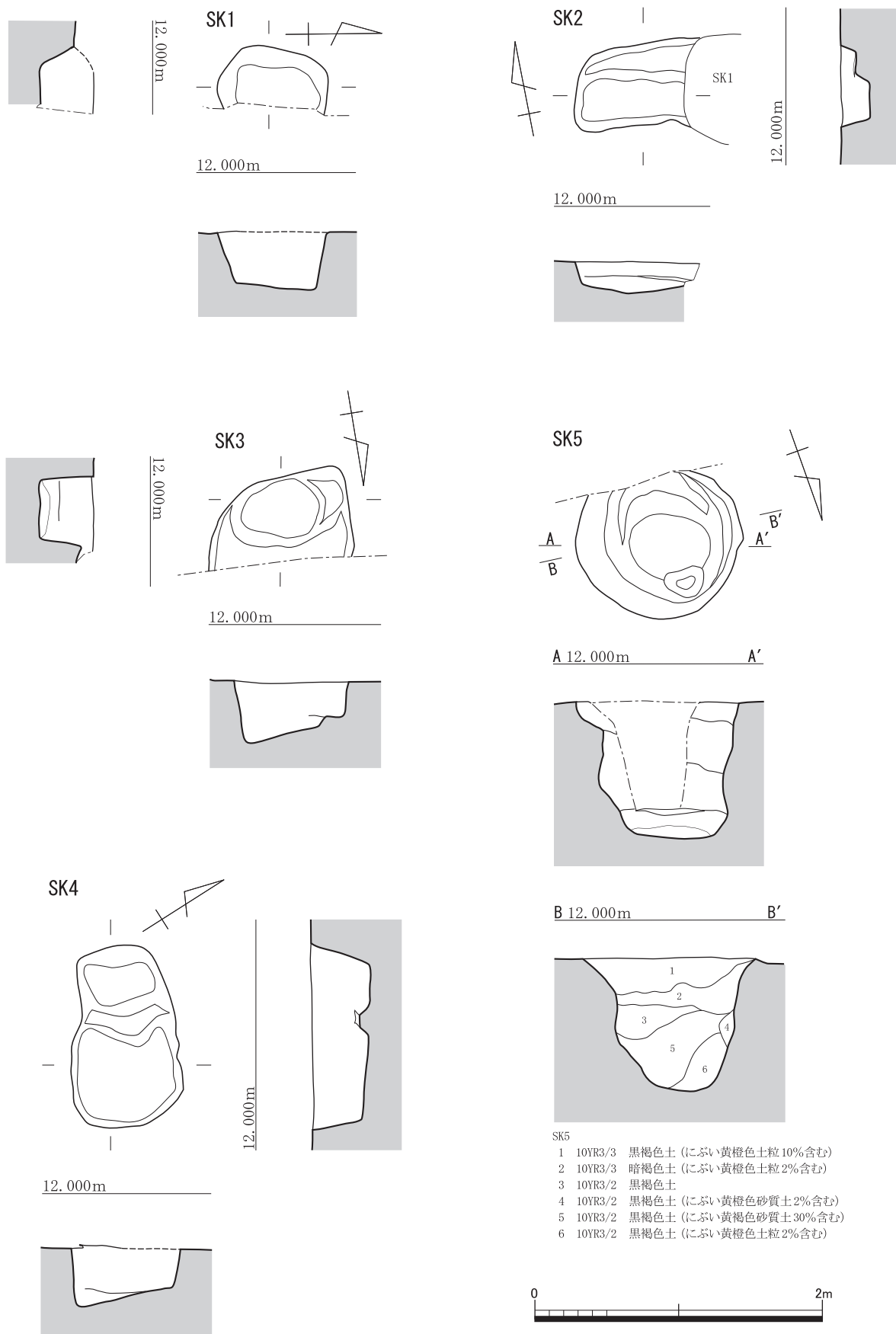
SP10はⅠ区の南東で検出した。染付の皿の底部が出土している。

SP37はⅡ区の中央、北寄りで検出した。回転ナデで成形し、底部が回転糸切りの皿が出土している。

SP40・45はⅢ区の北端で検出した。SP40からは口縁がL字を呈する中世の土鍋が出土している。外面は被熱により赤変しており、内面に細かい単位の工具ナデが見られる。SP45は陶器の蓋で、器壁は非常に厚手である。



第10図 ピット 出土遺物 (S=1/4)



第11図 1～5号土坑 平・断面図 (S=1/40)

【SK: 土坑】

1号土坑（第11図、図版3）

I区の南東隅に位置し、2号土坑を切る。遺構の東半部は調査区外へ延長する。主軸は東西方向と想定され、平面プランは楕円形を呈する。東西検出長0.43m、幅0.76m、深さ0.4mを測る。壁面は外反して立ち上がり、底面は北へ向かって緩やかに傾斜する。近世の所産。

埋土から近世の土師器や陶器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

2号土坑（第11図、図版3）

I区の南東隅に位置し、1号土坑に切られる。主軸は東西方向で、平面プランは楕円形を呈する。残存長0.75m、幅0.62m、深さ最大0.2mを測る。北側に幅0.17m、高さ0.1mのテラスを持つ。壁面は外反して立ち上がり、底面は中央がややくぼむものの、おおむね平坦である。近世の所産と思われる。

埋土からは弥生土器や古代の須恵器、近世の陶器などが出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

3号土坑（第11図）

I区の中央北端に位置し、遺構の北半部は調査区外へ延長する。主軸は南北方向と想定され、平面プランは楕円形を呈する。南北検出長0.62m、幅1.0m、深さ最大0.43mを測る。南側にテラスを持つ楕円形の掘り込みがあり、土坑そのものの深さは0.1m程度である。壁面は直立に近い立ち上がりで、底面は平坦である。近世の所産。

出土遺物（第13図）

埋土から1の染付の瓶が出土している。体部の絵柄は残存していないが、高台に呉須の線が1条めぐることから染付と判断した。畳付に砂が付着しており、部分的に打ち欠きが見られる。

4号土坑（第11図、図版3）

I区の中央南寄りに位置する。主軸は東西方向で、平面プランは楕円形を呈する。長さ1.26m、最大幅0.75m、深さ最大0.4mを測る。底面の西寄りに幅0.1mのテラスを持ち、ピット2基が結合したような体裁を取る。壁面は直立に近い立ち上がりで、東側の底面は北へ向かって緩やかに傾斜する。近世の所産。

埋土からは近世の染付が出土しているが、細片のため図示は控えた。

5号土坑（第11図、図版3）

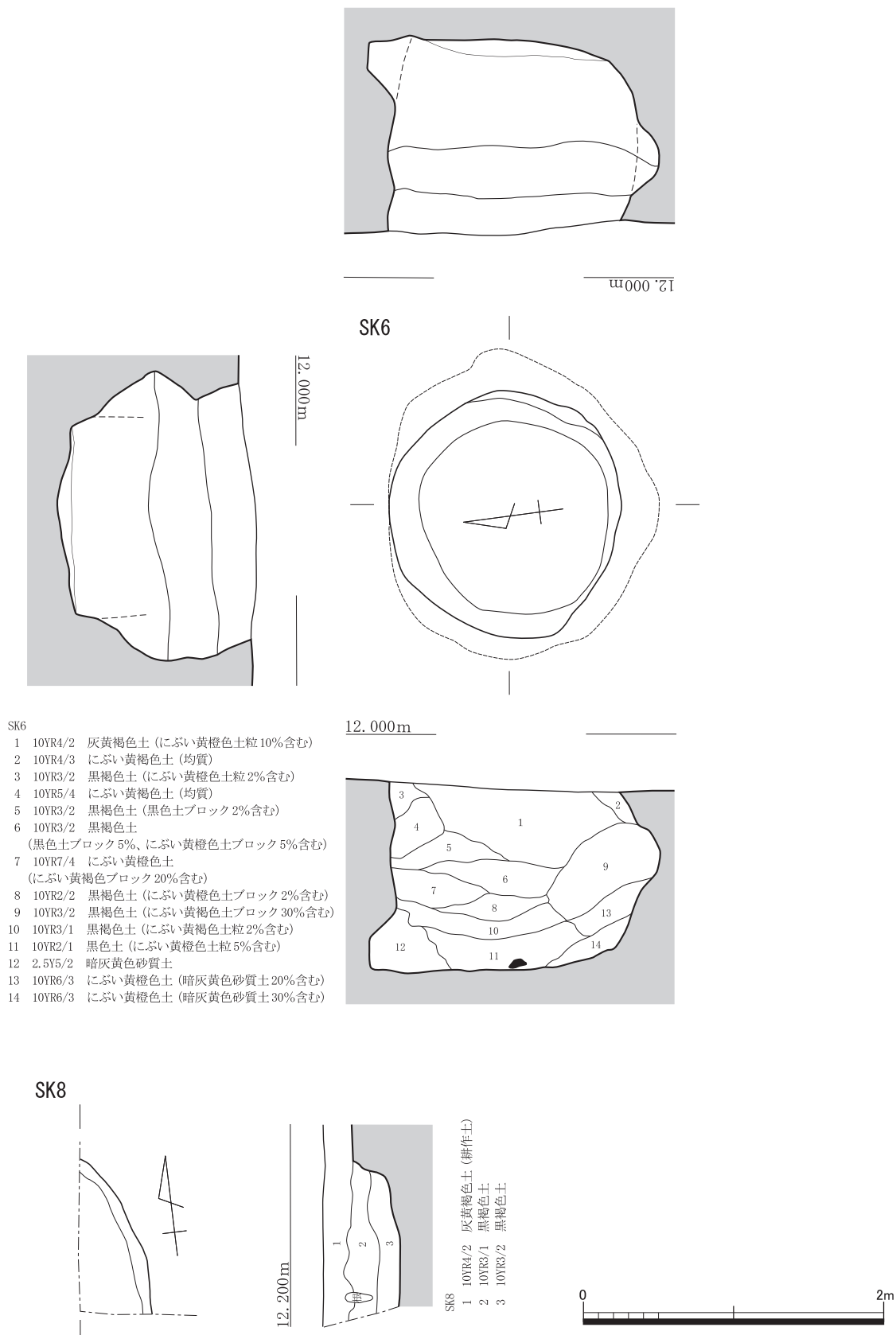
Ⅲ区の南西隅に位置し、遺構の南端は調査区外へ延長する。主軸は南北方向と想定され、平面プランは円形を呈する。南北検出長1.0m、幅1.14m、深さ0.94mを測る。壁面は緩く外反して立ち上がり、検出面から0.5mの位置で傾斜が変化する、いわゆる2段掘りの体をなす。南側には幅0.3mのテラスを持つ。埋土は黒褐色土を主体とし、ほぼ均質である。中世の所産。

出土遺物（第13図）

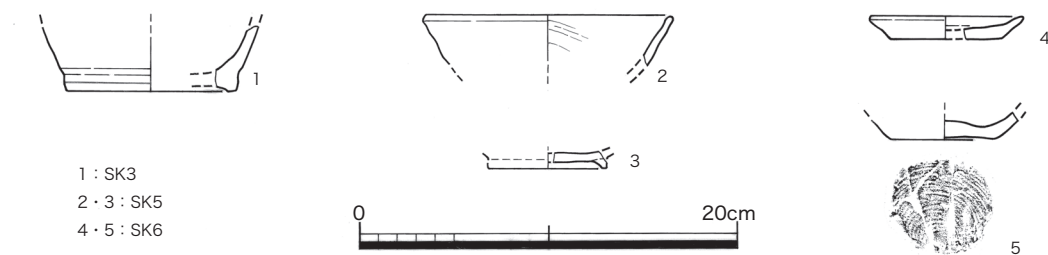
埋土から瓦器が出土している。2は埴の口縁部。表面の摩滅が著しいが磨きの痕跡が認められる。端部に重ね焼きによる色調の差がある。3は埴の底部。高台は貼り付けによるもので、摩滅のため調整は不明。

6号土坑（第12図、図版3）

Ⅲ区の南西隅に位置し、遺構の南端は調査区外へ延長する。主軸は南北方向と想定され、平面



第 12 図 6・8号土坑 平・断面図 (S=1/40)



第 13 図 土坑 出土遺物 (S=1/4)

プランは円形を呈する。南北検出長 1.0 m、幅 1.14 m、深さ 0.94 m を測る。調査時には、壁面の上位と中位にくの字の屈曲を確認した。埋土の状況より、本来の壁面は直立していたが、使用時に崩落して検出時の体となったと考えられる。11 ～ 14 の下層では、被熱により赤変した、あるいは煤が付着した、径 0.15 m 程度の花崗岩が複数出土した。いずれも加工痕跡は認められなかった。近世の素掘りの井戸と思われる。

出土遺物 (第 13 図、図版 4)

埋土から土師器の小片が出土している。4 は体部が直線的に外側へ延びるもの。5 はやや湾曲して立ち上がるもの。いずれも底部は回転糸切り。

7 号土坑 (第 4 図)

Ⅲ区の東、中央寄りに位置する。1 号住居に切られ、遺構の東側は調査区外へ延長する。主軸方向・平面プランとも不明である。南北検出長 0.7 m、東西検出幅 0.85 m、深さ 0.15 m を測る。埋土が黒色シルト主体の古いものであったため、遺構として報告する。

遺物の出土は認められない。

8 号土坑 (第 12 図、図版 3)

Ⅲ区の南西隅に位置し、遺構の大部分は調査区外へ延長する。主軸方向は不明であるが、平面プランは楕円形と想定される。南北検出長 1.0 m、東西検出幅 0.48 m、深さ 0.35 m を測る。

埋土から弥生土器の小片が出土しているが、図示はしていない。

【SX: 不明遺構】

調査対象地は畑地と工作物の所在地であったため、遺構検出時に多数の攪乱を確認した。作業の工程上、大型もしくは深いものは、切り合いのある遺構の掘削に支障がない程度まで掘削し、完掘は行っていない。近世より古い時期の遺物が出土した際は、SX の略称で不明遺構として番号を付加し、取り上げを行った。

1 号住居を切る 2 ・ 3 号不明遺構からは、近世の陶磁器がまとまって出土した。いずれも完掘していないが、この時期の廃棄土坑の可能性があるので報告する。

2 号不明遺構 (第 4 図)

Ⅲ区の北東隅に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、南北検出長 1.6 m、東西検出幅 1.6 m を測る。埋土は灰黄色砂質土で水性鉄を含む。

出土遺物 (第 14 図)

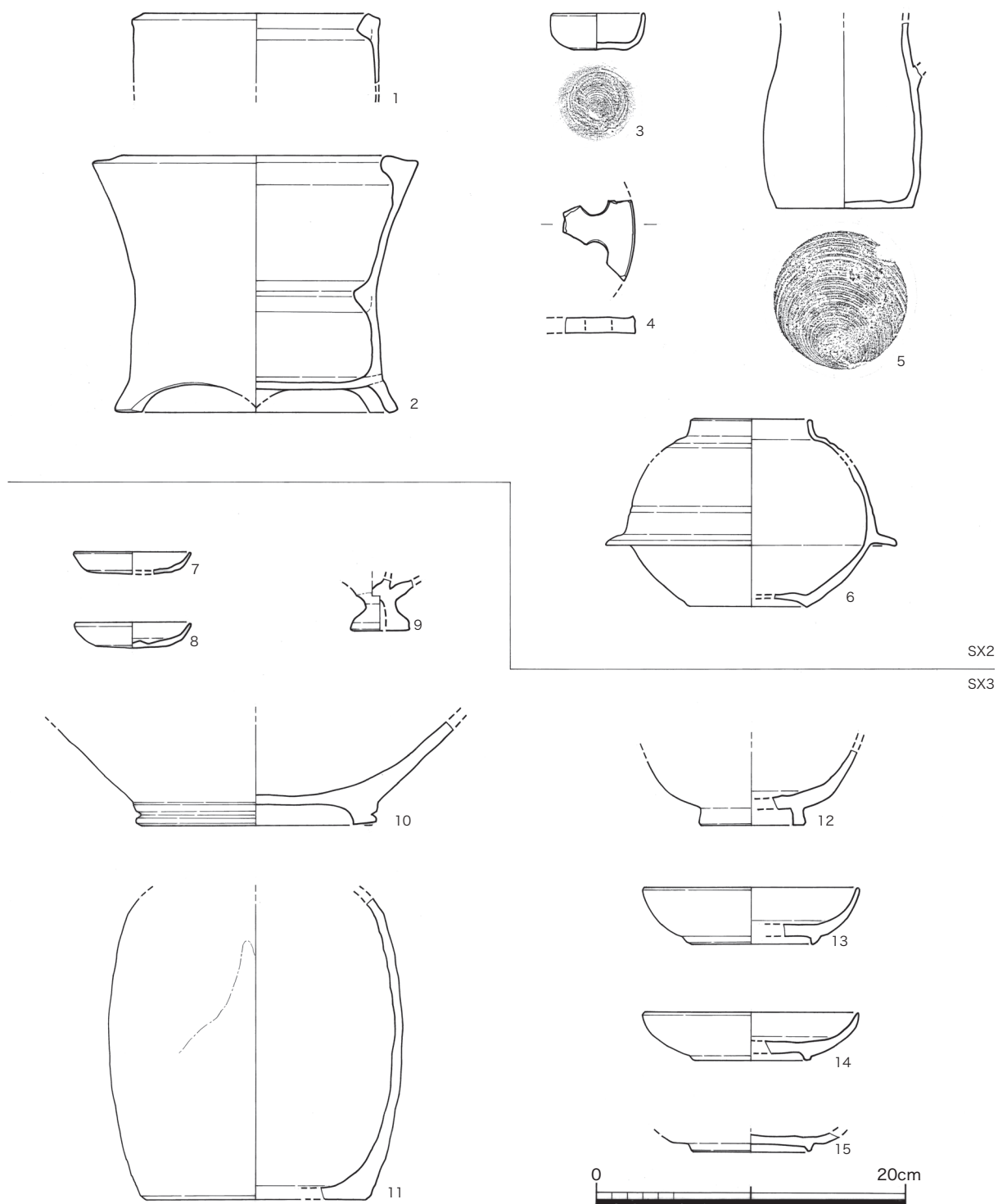
1 は火入れ、2 は火鉢、4 は七輪。1 ・ 2 は軟質で外面の釉薬の剥離が激しい。3 は燈明皿で、内面のみ釉薬を施し、底部は回転糸切り。5 は陶器の瓶で、底部外面は無釉。肩部に把手を持つものか。6 は羽釜、外面に黒色の釉薬を施す。羽より下には、被熱による釉薬の融解と濃い煤の付着

が見られる。

3号不明遺構（第4図）

Ⅲ区の北東、中央寄りに位置する。平面プランは不整形で、南北長 1.7 m、東西幅 1.0 mを測る。
出土遺物（第14図、図版4）

7・8は土師器の皿。体部は湾曲して立ち上がる。6は陶器の灯火具。10は陶器の播鉢、使用により播目の凹凸は残存していない。18世紀後半のもの。11は陶器の瓶、福岡産か。12は染付の碗、貼り付けの高台や紋様の色調から肥前産ではないと考えられる。13～15は染付の皿。14・15は見込みに蛇の目釉剥ぎが認められる。18世紀後半の所産。



第14図 不明遺構出土遺物（S=1/4）

IV. 調査成果のまとめ

【弥生時代の遺構について】

今回報告した福童東内畑遺跡と東に隣接する福童町遺跡では、これまで合計 19 回の発掘調査が行われ、古墳時代から近世にかけての複合遺跡であることを確認している。

今回の調査区では、弥生時代中期の住居を 2 軒確認した。福童東内畑遺跡・福童町遺跡では、この時期の遺構は初見である。なおこれまでの調査では、この時期の遺構は検出していないが、以下の遺構から混入品として弥生土器等が出土しており、遺構の存在が示唆されていた。

調査次数	器形・残存状態	出土遺構
福童町遺跡 3 次	石庖丁（赤紫色泥岩製） 甕（中期、底部小片） 壺（中期、口縁部小片） 甕（中期、口縁部及び底部小片）	I 区 3 号溝状遺構 III 区 2・3 号溝状遺構 III 区 4 号溝状遺構
福童町遺跡 8 次	甕（中期、口縁部及び底部小片） 高坏（中期、丹塗、脚部小片） 高坏（後期、口縁部小片）	1 号溝状遺構
福童町遺跡 9 次	甕（中期、口縁部小片） 弥生土器片（丹塗） 弥生土器片（器形不明）	1 号溝 1 号墓（近世墓）
福童町遺跡 10 次	弥生土器片（器形不明）	2 号溝
福童町遺跡 14 次	弥生土器片（器形不明）	1 号ピット
福童東内畑遺跡 1 次	甕（中期、底部小片） 壺（後期、口縁部小片）	8 号土坑 9 号溝

令和 4（2022）年に調査した福童内畑遺跡（大中臣神社の東側隣接地）では、本書で報告した住居よりやや新しい弥生時代中期の住居や後期の住居群を検出している（市報告書 356 集）。また県境を越えた鳥栖市飯田町の飯田遺跡でも、中期の住居 6 軒と円形周溝 2 基を確認したとの報告がある（鳥栖市年報 2002 年度版）。いずれの遺跡も、北から延びる低位段丘が南の沖積地に連なる縁辺部に所在する。この集落は、段丘の落ち際に沿って南―西のラインに展開し、鳥栖市まで及ぶ可能性が高い。また、過去に県道工事に際して甕棺が出土した記録があり、隣接して墓域も営まれていたと考えられる。

福童町遺跡 1 次調査では、福童内畑遺跡の集落に続く、古墳時代初頭のまとまった遺物を持つ遺構が確認されている。弥生時代後期から古墳時代初頭の集落への変遷、また北に近接する銅戈埋納遺構を検出した寺福童遺跡との関連などについて、今後の調査に期待される。

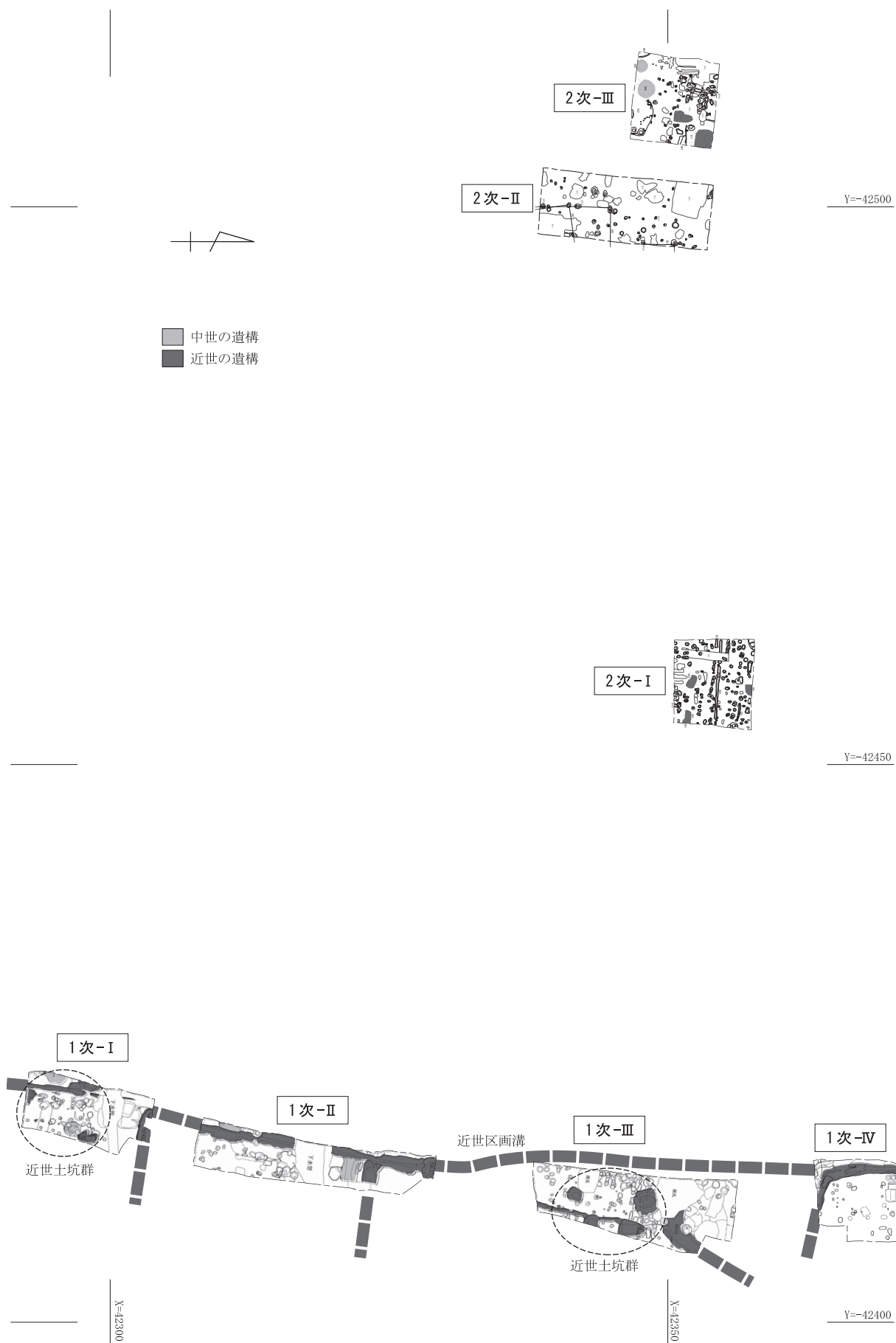
【近世の遺構について】

福童東内畑遺跡・福童町遺跡の近世の遺構は大半が溝状遺構だが、検出幅が 2.0 m 前後の大型のものと 1.0 m 前後の小規模なものに二分できる。南北方向のものは正方位に乗るものが多いが、東西方向のものは一定の角度がつく傾向がある。また、小規模な溝に近接して井戸が確認される例が多い。

明治 22（1889）年の地籍図によると、福童東内畑遺跡 1 次調査 IV 区の北端を境に、南側は宅地の広がる集落の中心で、北側は水路をめぐらした畑地であった。

今回の調査で検出した不明遺構からは、福童東内畑遺跡 1 次調査で出土した遺物と同時期ものを含んでおり、近世区画溝や土坑群と一連の生活圏がこの範囲まで形成されていたことが明らかになった。

鳥栖市飯田遺跡については鳥栖市教育委員会生涯学習課の湯浅満暢氏にご教示いただいた。文末ながら記して感謝申し上げます。



第 15 図 周辺調査地検出遺構 (S=1/500)

福童東内畑遺跡 2 遺物観察表

法量＝口：口径、高：器高、残：残存高、底：底径、高台：高台径
 器種＝弥：弥生土器、土：土師器、瓦：瓦器、陶：陶器、磁：磁器

挿図番号	図版 番号	出土遺構		器種	法量 cm・ (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考	実測 番号
第8図 1		1号 住居	—	弥・甕	口:(18.4) 残:3.3	内:黄橙色 外:黒褐色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:タテハケ 体・内:ヨコナデ	体部外面に煤付着	SC1-3
第8図 2			—	弥・甕	口:(23.0) 残:4.5	内・外:浅黄橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:ヨコナデ 体・内:工具によるヨコナデ		SC1-2
第8図 3	4		—	弥・甕	口:(22.4) 残:9.2	内・外:浅黄橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体:ヨコナデ、貼付突帯		SC1-1
第8図 4			—	弥・甕	残:4.4 底:(7.4)	内:褐灰色 外:にぶい黄橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:タテハケ 体・内:ナデ	底部内面に煤付 着、黒変あり	SC1-4
第8図 5			—	弥・甕	残:4.4	内:灰黄褐色 外:黄橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:タテハケ 体・内:ナデ	底部内面に煤付着	SC1-5
第8図 6	4		図①	弥・器台	口:9.9 高:14.3 底:11.1	内・外:黄橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:タテハケ 体・内:工具ナデ、ヨコハケ 底:ヨコナデ	内面に絞り込み痕 跡 底部端部に被熱に よる赤変	SC1-7
第8図 7			—	弥・壺	残:6.0	内・外:明赤褐色 ～橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	外:ヨコナデのちタテミガキ 内:ヨコミガキ	内外面とも丹塗り	SC1-6
第8図 8		2号 住居	東半部	弥・甕	口:(30.9) 残:5.25	内・外:浅黄橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:タテハケ		SC2-6
第8図 9			—	弥・甕	口:(32.2) 残:7.3	内・外:黄色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:タテハケ 体・内:ヨコナデ		SC2-2
第8図 10	4		ベルト 西半部	弥・甕	口:(32.8) 残:11.7	内・外:浅黄橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:タテハケ 体・内:ヨコナデ	口縁部に煤付着、 被熱による赤変	SC2-1
第8図 11			東半部	弥・甕	口:(35.9) 残:5.9	内・外:浅黄橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・外:タテハケ 体・内:ヨコナデ	口縁内部に煤付着	SC2-3
第8図 12			東半部	弥・壺	口:(29.1) 残:2.5	内・外:明赤褐色 ～橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ、放射状暗文	内外面とも丹塗り	SC2- 10
第8図 13			—	弥・壺	残:3.6	内:灰白色 外:浅黄橙色～褐 灰色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:ヨコミガキ 体・内:工具によるヨコナデ	外面は黒塗り	SC2- 11,12
第8図 14			東半部	弥・甕	口:(25.0) 残:2.7	内・外:浅黄色～ 灰白色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体:ヨコナデ		SC2-4
第8図 15			東半部	弥・甕	口:(25.4) 残:7.25	内・外:黄色～黄 橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ 体・内:工具によるヨコナデのち ナデ消し		SC2-5
第8図 16			SP1	弥・甕	口:(22.2) 残:5.15	内・外:浅黄橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ	内外面とも丹塗りの 可能性	SC2-7
第8図 17		6号 土坑	—	弥・甕	残:4.2 底:(4.2)	内:灰白色 外:にぶい橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:タテハケ 体・内:ヨコナデ 底:ナデ	底部内面及び体部 外面に煤付着	SK6-1
第10図		31号 ピット	—	弥・壺	残:15.8	内:淡黄色 外:淡黄色～黄灰 色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:工具によるナデ 体・内:ヨコナデ、工具によるナ デ	体部外面に黒斑	SP31- 1
第10図	4	59号 ピット	—	弥・壺	残:6.7 底:(6.3)	内:橙色 外:明赤褐色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:タテミガキ、ヨコミガキ 体・内:工具ナデのちミガキ 底:ミガキ	内外面とも丹塗り	SP59- 1
第10図		30号 ピット	—	弥・器台	残:6.1 底:(11.0)	内・外:浅黄色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:タテハケ 体・内:工具ナデ、ヨコハケ		SP30- 1
第10図		37号 ピット	—	土・皿	口:(8.3) 高:1.25 底:(6.0)	内・外:灰白色	やや粗 1mm以下の砂粒を 少量含む	良	口:回転ナデ 体:回転ナデ 底:回転糸切り		SP37- 1
第10図		40号 ピット	—	土・鍋	残:4.2	内:橙色 外:浅黄橙色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:ヨコナデ、縄目 体・外:タテハケ 体・内:工具によるナデ	体部外面に被熱に よる赤変	SP40- 1
第10図		45号 ピット	—	陶・蓋	残:2.8	素:にぶい赤褐色 釉:浅黄色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	体:クロロ水引き		SP45- 1
第10図		10号 ピット	—	陶・埴	残:1.6 高台:(4.8)	素:にぶい黄橙色 釉:暗褐色	密 1mm以下の砂粒を ごく微量に含む	良	体:クロロ水引き	高台は削り出し	SP10- 1
第13図 1		3号 土坑	—	磁・瓶	残:3.4 底:(9.0)	素:灰白色 釉:灰白色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	体:クロロ水引き	高台は削り出し	SK3-1
第13図 2		5号 土坑	—	瓦・埴	口:(13.0) 残:2.5	内・外:灰色～灰 白色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	体・外:ヨコナデ 体・内:ヨコミガキ	重ね焼きによる色 調変化あり	SK5-1
第13図 3			—	瓦・埴	高台:(6.2) 残:0.9	内:灰色 外:灰白色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	摩滅のため調整不明	高台は貼り付け	SK5-2
第13図 4			西半部	土・皿	口:(8.0) 残:1.2 底:(5.8)	内・外:橙色	密 1mm以下の砂粒を 少し含む	良	口:回転ナデ 体:回転ナデ、不定ナデ 底:回転糸切り		SK6-2
第13図 5	4		東半部	土・皿	残:1.4 底:5.8	内・外:にぶい橙 色	密 2mm以下の砂粒を 少し含む	良	体:回転ナデ、不定ナデ 底:回転糸切り		SK6-3

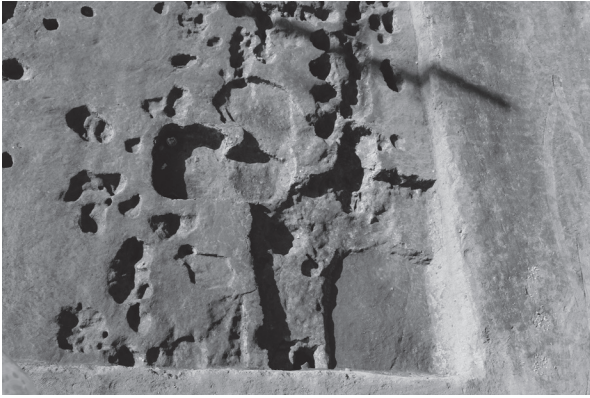
挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量 cm・ (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考	実測 番号
第 14 図 1		2 号 不明 遺構	一 陶・火入	口:(14.5) 残:4.5	素:にぶい黄橙色 釉:淡黄色	密 1mm 以下の砂粒を 微量に含む	やや 軟	口:回転ナデ 体:回転ナデ		SX2-2
第 14 図 2			一 陶・火鉢?	口:(20.9) 高:16.2 高台:(18.2)	素:にぶい黄橙色 釉:淡黄色	密 1mm 以下の砂粒を 少量含む	やや 軟	口:回転ナデ 体:回転ナデ 底:工具による回転ナデ	口縁部及び内面に 煤付着 口縁部は被熱による 赤変	SX2-1
第 14 図 3			一 陶・灯明皿?	口:5.8 高:2.3 底:3.8	素:にぶい黄褐色 釉:黄褐色	密 1mm 以下の砂粒を ごく微量に含む	良	口:クロロ水引き 体:クロロ水引き 底:回転糸切り	口縁部外面に油染 みと煤付着	SX2-6
第 14 図 4			一 陶・七輪	残存 幅:4.7 高:1.1	素:橙色 釉:灰白色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	表・裏:回転ナデ、不定ナデ 側:回転ナデ		SX2-7
第 14 図 5			一 陶・瓶	底:8.8 残:11.8	素:にぶい橙色 釉:暗褐色	密 1mm 以下の砂粒を 微量に含む	良	体:クロロ水引き 底:回転糸切り		SX2-3
第 14 図 6			一 陶・羽釜	口:(7.6) 高:(12.0) 底:7.6	素:淡橙色 釉:黒色	密 1mm 以下の砂粒を ごく微量に含む	良	口:クロロ水引き 体:クロロ水引き、回転ケズリ	体部外面下方に煤 付着	SX2-4
第 14 図 7		3 号 不明 遺構	一 土・皿	口:(7.6) 残:1.35 底:(6.0)	内・外:黄橙色	密 1mm 以下の砂粒を 微量に含む	良	口:回転ナデ 体:回転ナデ 底:回転糸切り		SX3-1
第 14 図 8			一 土・皿	口:(7.5) 残:1.6 底:(4.8)	内・外:浅黄橙色	密 1mm 以下の砂粒を 微量に含む	良	口:回転ナデ 体:回転ナデ 底:回転糸切り		SX3-2
第 14 図 9	4		一 陶・ひょうそく	残:3.3 底:3.7	素:にぶい橙色 釉:暗オリーブ褐色	密 1mm 以下の砂粒を 極微量に含む	良	体:クロロ水引き 底:回転糸切り		SX3-6
第 14 図 10	4		一 陶・播鉢	残:6.75 底:(15.6)	素:にぶい赤褐色 釉:暗赤灰色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	体:クロロ水引き、回転ケズリ 底:回転ケズリ	9 条 1 組の播目(摩 減) 高台は貼り付け	SX3-5
第 14 図 11	4		一 陶・瓶	残:19.3 底:(14.0)	素:暗赤褐色 釉:青黒色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	体:クロロ水引き 底:回転糸切り		SX3-4
第 14 図 12	4		一 磁・碗	高:(4.8) 高台:6.8	素:灰白色 釉:灰白色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	体:クロロ水引き	高台は貼り付け	SX3-7
第 14 図 13	4		一 磁・皿	口:(13.8) 高:3.6 底:(8.4)	素:灰白色 釉:明青灰色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	口:クロロ水引き 体:クロロ水引き	高台は削り出し 離れ砂の痕跡あり	SX3-8
第 14 図 14	4		一 磁・皿	口:(13.8) 高:3.1 底:(7.5)	素:灰白色 釉:明青灰色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	口:クロロ水引き 体:クロロ水引き	体部内面に蛇の目 釉剥ぎと離れ砂の 痕跡	SX3-9
第 14 図 15	4		一 磁・皿	口:(13.8) 高:3.6 底:(8.6)	素:灰白色 釉:明青灰色	密 1mm 以下の砂粒を 少し含む	良	口:クロロ水引き 体:クロロ水引き	体部内面に蛇の目 釉剥ぎと離れ砂の 痕跡 コンニャク印判	SX3-10



① I 区全景（西から）



② II・III 区全景（東から）



① 1号住居 全景（西から）



② 1号住居 遺物出土状況（1）（北から）



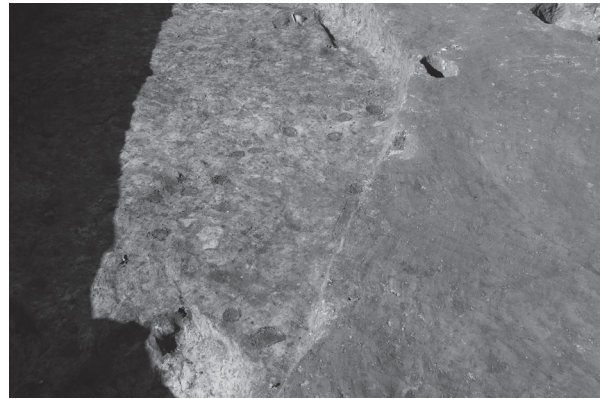
③ 1号住居 遺物出土状況（2）（北から）



④ 1号住居 完掘状況（北から）



⑤ 2号住居 土層断面（東から）



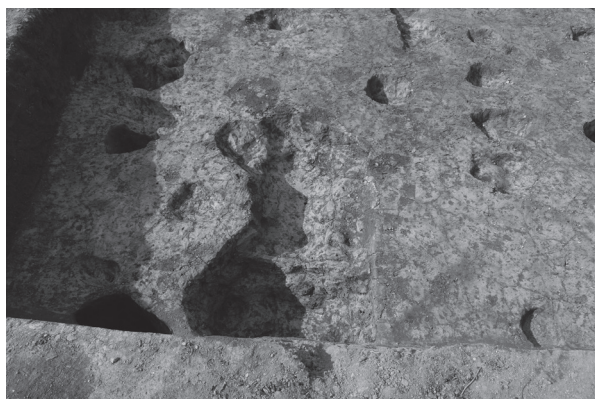
⑥ 2号住居 小ピット検出状況（北東から）



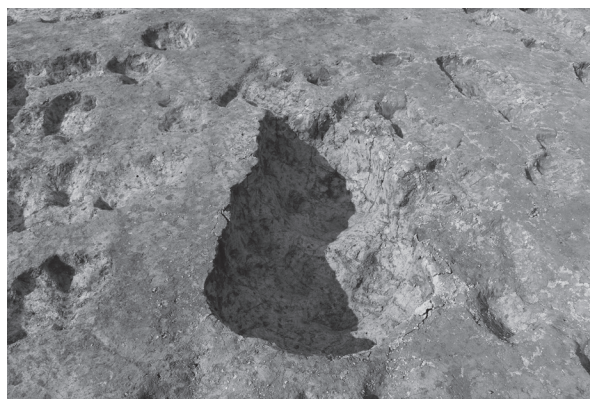
⑦ 2号住居 全景（西から）



⑧ 2号住居 完掘状況（北から）



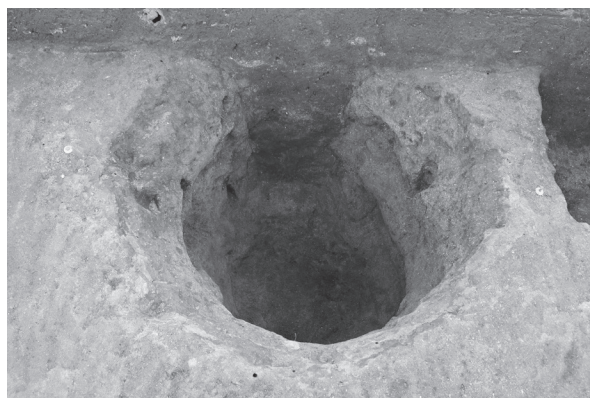
① 1・2号土坑 完掘状況（東から）



② 4号土坑 完掘状況（東から）



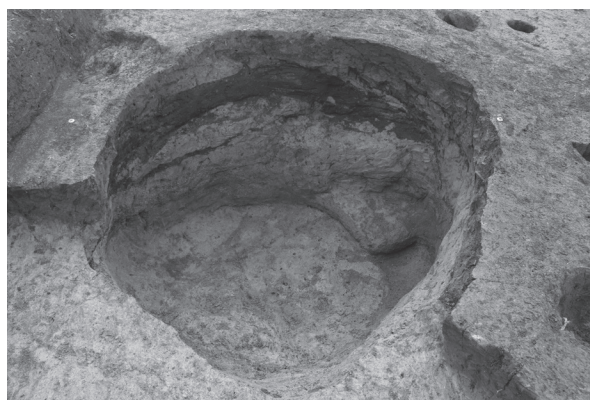
③ 5号土坑 土層断面（北から）



④ 5号土坑 完掘状況（北から）



⑤ 6号土坑 土層断面（西から）



⑥ 6号土坑 完掘状況（東から）

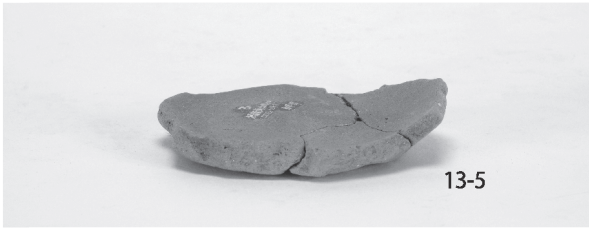
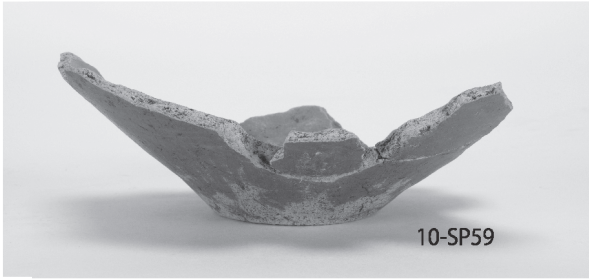
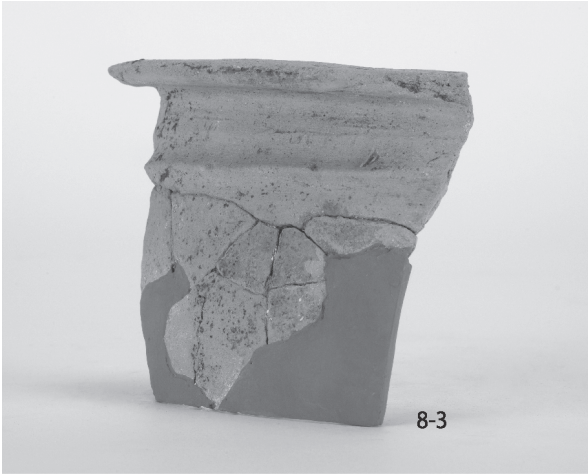


⑦ 8号土坑 土層断面（東から）



⑧ 8号土坑 完掘状況（西から）

圖版 4



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふくどうひがしうちはたいせき								
書名	福童東内畑遺跡 2								
副書名	福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告								
巻次									
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 369 集								
編著者名	上田 恵								
編集機関	小郡市教育委員会								
所在地	〒 838-0198 福岡県小郡市小郡 255- 1 Tel.0942-72-2111								
発行年月日	2025（令和 7）年 3 月 31 日								
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター								
保管場所 所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 Tel.0942-75-7555								
ふりがな	ふりがな		市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地								
ふくどうひがしうちはた 福童東内畑 遺跡 2	おごおり し 小郡市 ふくどう 福童		40216		33° 38′ 09″	130° 54′ 31″	2023.11.14 ～ 2023.12.25	265.56㎡	宅地造成 建売住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物				
福童東内畑 遺跡 2	集落跡	弥生 中世 近世	住居・ピット 土坑・ピット 土坑		弥生土器 土師器・陶磁器・鉄器 土師器・陶磁器				
特記事項	<p>福童の低位段丘に分布する遺跡群のうち最も西側にあたり、県境を隔てて佐賀県鳥栖市・飯田遺跡に隣接する。</p> <p>周辺の遺跡で多数の遺構を検出している中世～近世の土坑と、当地域では初見である弥生時代中期の住居を確認した。</p> <p>弥生時代中期の集落については、範囲や福童東畑遺跡で確認している弥生時代後期の集落との関連など、今後の周辺調査の結果を待って検討が必要である。</p>								

福童東内畑遺跡 2

—福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第 369 集

編集 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255 - 1

発行 スマートファイブ
福岡県小郡市小郡 1572 - 9

